

# 第14回応用言語学セミナー

## テーマ：言語の多様性と普遍性

今回は、「言語の多様性と普遍性」というテーマの下、言語のタイポロジーと普遍的側面に焦点を絞って多角的に考察を加えたいと思います。

世界中で言語はいくつあるかという問いに対しては、例えば、スペイン語とポルトガル語とイタリア語を3つの言語とするかどうか(通例は3つの言語とみなしていますが)によって変わってきます。一方、日本語の青森方言は、標準語の話者にはほとんど何を言っているのかは通じないだけでなく、青森方言と鹿児島方言の話者同士は、相互にほとんど理解できないにもかかわらず、この3つは、方言として扱われており、異なる「言語」とは分類されていません。中国の上海方言と天津方言と北京方言の話者は、お互いに何を言っているのか理解できない(ことがある)と言われているが、この3つも、「方言」とみなされています。したがって、世界には、言語がいくつあるかは、数え方によって、大きく異なることとなります。「言語」と言おうと「方言」と言おうと、ことばの何らかの側面で違っており、表面上は、各言語は多様であり、それぞれに特徴を持っています。

しかし、人間言語は多様性の背後に、共通の性質を備えており、それを普遍性と呼んでいます。民族や、性別、能力等が違っていても、人間であれば、人間の言葉を身につけ、使いこなすことができます。しかし、いかに優れたチンパンジーであろうとボノボであろうと人間の言語を獲得し、使いこなすことはできません。人間言語を人間に固有のものたらしめているものこそ、言語の普遍性ということができます。その普遍的な原理はどのようなもののでしょうか。いろいろな観点から考察してゆくことにしたいと思います。

日時：2011年12月17日(土)

場所：明海大学浦安キャンパス

講義棟2階 2201教室

〒279-8550 千葉県浦安市明海1丁目

### ◆ ご挨拶

応用言語学セミナーは、今回で14回目を迎えます。今回は、私が研究代表者を務めている文部科学省科学研究費補助金(A)「自律調和的視点から見た音韻類型のモデル」の最終年度に当たる関係上、その成果の一端を含め、他の専門家をも交えて開催することになりました。本セミナーで発表する科研のメンバーは3名です。

今回の応用言語学セミナーのテーマは、「言語の多様性と普遍性」です。言語は、表面的には実に多様に見えますが、その背後には、驚くべき共通の性質、つまり、普遍性を備えています。

アメリカ構造主義言語学は、言語の多様性に目をとられて、普遍性には、ほとんど注意が払われませんでした。その弊害は、生成文法の研究では、克服され、言語の普遍性と多様性にしかるべく注意が払われ、研究が活発になされています。言語のタイポロジーの研究も深くかつ多面的になされています。

人間は、言語を身につけることによって、驚くべき知見を身につけ、宇宙の大きさのような大きいものから、クオークのような小さなものまで、ある程度の理解にいたっています。人間は、言語を獲得することによって、寿命まで延ばしています。と言うことは、人間言語の性質をよりよく理解することは極めて重要な意味を持つこととなります。

言語についてどこまで理解するようになったのか、多角的に見てゆきたいと思います。発表者のものの見方と考え方についても、多様性と普遍性にも注目するとなかなか楽しめるのではないのでしょうか。

明海大学応用言語学研究科長・外国語学部長

原口庄輔

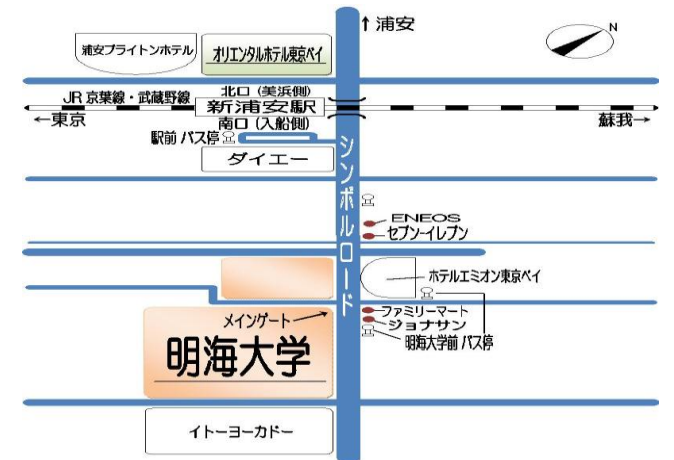
[-明海大学応用言語学セミナーのホームページ-](#)

明海大学 第14回応用言語学セミナー

Meikai Applied Linguistics Seminar (MALS)

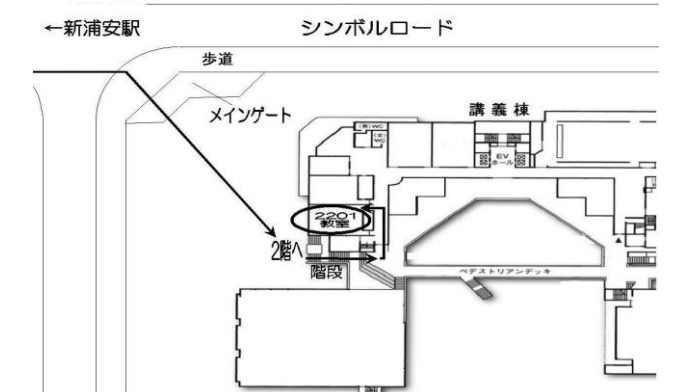
### ◆ 交通手段

東京駅よりJR京葉線・武蔵野線快速で約17分、新浦安駅下車。南口(入船側、ダイエー方向)からシンボルロードを通って、徒歩約10分。または駅南口ロータリーのバス停から、③⑩⑫⑭⑯番系統のいずれかのバスで約5分「明海大学前」にて下車。運賃140円。



### ◆ キャンパス略図

メインゲートから建物の間の階段を上がり、左手の建物(講義棟)2階に入った一番手前の教室、2201教室へ。





# プログラム

2011年12月17日(土)

講演 2201 教室

9:30 受付開始

10:00 開会

10:00 - 10:05 挨拶

原口庄輔 (明海大学大学院応用言語学研究所長

外国語学部長)

午前司会: 西山佑司

10:05 - 11:05

原口庄輔 (明海大学 教授)

「言語の普遍性とタイポロジー」

言語の普遍的な性質、つまり、普遍原理は、どのようになっているのでしょうか。言語の普遍性と言語毎の多様性はどのように説明したらよいのでしょうか。原理とパラメータの関係で処理できる多様性と、全く独自の固有性(例外)に帰すことのできる多様性は分けて考えるのがよいと思います。言語以外の(文化的な)原理が関わってくる多様性も考えられます。これらのファクターが、言語のタイポロジーとどのように関わっているのか、語順や音節の構造などについて、多角的に考えてみたいと思います。

11:10 - 12:10

福井直樹 (上智大学 教授)

「内在主義からみた人間言語の普遍性と多様性」

「言語」を人間の脳内に存在する「話す能力」

(および、そのような能力を獲得するメカニズム)と考える内在主義(Internalism)からみると、人間言語が示す「多様性」は決して当たり前のことではなく、驚くべき、それ自体説明を必要とする現象である。この講演では、チョムスキーによって言語学に本格的に導入された内在主義が、どのように「多様性」の問題に取り組んできたかを概観し、これからの研究方向についても意見を述べてみたい。

12:10 - 13:10 <昼休み>

午後 前半司会: 遊佐昇

13:10 - 14:10

劉 勳寧 (明海大学 教授)

「北京語の母音システムの理論的分析及び教育への応用」

中国語の標準語である北京語に母音がいくつあるか、いままでのところ定説はないが、アメリカの学者による2母音の学説は魅力的である。もちろん、2母音説は一般の母音システムの類型論上の逆三角形とは異なる。理論的分析の紛争はさておき、応用の面で、2母音説をどのように運用するか、この講演で考えてみたい。

14:15 - 15:15

時崎久夫 (札幌大学 教授)

「音声と文法の普遍的相関」

世界の言語は、音声も文法も無限に多様であるように見えます。しかし、ここでは、音節の構造や強勢の位置などの音声的な特徴が、複合語や語順などの文法的な特徴と普遍的に関連していることを示します。少数の基本的な特徴が他の多くの特徴を生み出す理由を考え、言語は多様性の中に整然と秩序を持っていることを述べます。

午後 後半司会: 井上史雄

15:25 - 16:25

西山國雄 (茨城大学 准教授)

“From Second Position Clitic to Multiple Agreement: Grammaticalization in Languages in Eastern Indonesia”

接辞代名詞から一致表現への変化は多くの言語に見られる文法化の例だが、接辞と一致の区別は曖昧なことが多い。本稿では典型的な接辞と一致を、それぞれ第2位置接辞と多重一致と定義し、この2つが文法化の両端あると仮定する。そしてオーストロネシア語族の中で、東インドネシアの言語がこの文法化の段階的な変化の実例となることを示す。

16:30 - 17:30

桜井 隆 (明海大学 教授)

「アフリカンス語に見るピジン性」

ピジンは文法が簡略化されていると言われるが、他言語との接触で別の要素が入り込むことにより、かえって複雑さを増している面もある。また、非正規の言語と見なされるため、過去の用例を集めようとしても、資料が見当たらないとされることも多い。ピジンの研究にはいかなる研究態度をとるべきか、アフリカンス語その他を例として再考する。

閉会 挨拶: 山下早代子

18:00 - 20:00

<懇親会> 場所: オリエンタルホテル東京ベイ

**参加ご希望の方は、お手数ですが12月9日(金)までに電子メール、FAXまたは葉書で、以下の①~⑤を明記の上、お申込み下さい。**

①住所 ②氏名(ふりがな) ③電話(FAX)番号

④Eメールアドレス ⑤懇親会参加の可・否

**お問い合わせ: 明海大学応用言語学セミナー事務局**

TEL: 047-355-5120 FAX: 047-350-5504

Email: gsalseminar@meikai.ac.jp

(@を小文字に)